

拾遺黒谷語録
(和語)
釈文

拾遺黒谷語録卷中
上漢語中
下和語

獸欣沙門了惠集録

登山状 第一

或る人に示すことば 第二

津戸返状 第三

或る女房に示す法語 第四

登山状 第一

源空

一流浪三界

それ流浪三界の内、いづれの界に趣きてか釈尊の出世に値わざりし。輪廻四生の間いづれの生を受けてか如来の説法を聞かざりし。華嚴開講の筵にも交わらず、般若演説の座にも連らず、鷲峯説法の庭にも臨まず、鶴林涅槃の砌にも至らず。我れ舍衛の三億の家にや宿りけん、知らず地獄八熱の底にや棲みけん。恥ずべし恥ずべし、悲しむべし悲しむべし。まさに今多生曠劫を経て生まれ難き人界に生まれて、無量劫を送りて遇い難き仏教に遇えり。釈尊の在世に値わざること悲なりといえども、教法流布の世に遇う事を得たるはこれ悦なり。

今日もまた空しく明けぬ

譬えは目しいたる亀の浮木の穴に遇えるごとし。我が朝に仏法流布せし事も、欽明天皇、天の下を知召して十三年、壬申の年、冬十月一日、初めて仏法渡りたまひし、それより前には如来の教法も流布せざりしかば、菩提の覚路いまだ聞かず。ここに我らいかなる宿縁に報え、いかなる善業によりてか仏法流布の時に生まれて生死解脱の道を聞く事を得たる。しかるを今遇い難くして遇う事を得たり。徒に明かし暮らして止みなんこそ悲しけれ。

あるいは金谷の花を翫びて遅遅たる春を空しく暮らし、あるいは南楼に月を嘲りて縵縵たる秋の夜を徒に明かす。あるいは千里の雲に馳せて山の鹿を探りて年を送り、あるいは万里の波に浮かびて海の鱗を探りて日を重ね、あるいは厳寒に氷を凌ぎて世路を渡り、あるいは炎天に汗を拭いて利養を求め、あるいは妻子眷属に纏われて恩愛の絆切り難し。あるいは執敵怨類に遇いて瞋患の焰息む事なし。総じてかくのごとくして昼夜朝暮行住坐臥、時として息む事なし。ただ縦にあくまで三途八難の業を重ね。しかればある文には「一人一日の中に八億四千の念あり、念念の中の所作みなこれ三途の業」といえり。かくのごとくして昨日も徒に暮れぬ、今日もまた空しく明けぬ。今幾度か暮らし幾度か明かさんとする。

それ朝あしたひらに開ひらくる栄華えいがは夕ゆうべの風かぜに散ちり易やすく、夕ゆうべに結むすぶ命露めいろは朝あしたひの日きに消やすえ易やすし。これを知しらずして常つねに栄さかえん事を欲おもい、これを悟さとらずして常つねにあらんことを欲おもう。しかる間あいだ無常むじょうの風かぜ一度吹ふけば有為うゐの露つゆ永ながく消きえぬれば、これを曠野こうやに棄すてこれを遠とほき山やまに送おくる。屍かばねは終ついに苔こけの下したに埋うずもれ魂たましいは一人旅ひとりたびの空そらに迷まよう。妻子さいし眷属けんぞくは家いえにあれども伴ともなわず、七珍万宝しつちんまんぼうは蔵くらに満みてれども益やくもなし。ただ身に随したがうものは後悔こうかいの涙なみだなり。終ついに閻魔えんまの庁ちやうに至いたりぬれば罪つみの浅深せんじんを定め業ごうの軽重きやうじゆうを勸かえらる。法王ほうおう、罪人ざいにんに問といていわく「汝なんじ仏法流布ぶつぽうの世よに生むまれてなんぞ修行しゆぎやうせずして徒いたずらに帰かえり來きたるや」。その時ときには我われらいか答こたえんとする。速すみやかに出しゆつ要ようを求もとめて空むなしく帰かえる事ことなかれ。

そもそも一代諸教いちだいにしよきやうの中うち、顕宗けんしゆ密宗みつしゆ、大乘だいじやう小乘しやうじやう、權教ごんきやう實教じつきやう、論家ろんげ、部ぶ八宗はつしゆに分わかれ義ぎ万差まんしゃに連つらなりて、あるいは万法皆空まんぼうかいくうの宗しゆを説とき、あるいは諸法実相しよぼうじつそうの心こころ明あかし、あるいは五性ごしやう各別かくべつの義ぎを立て、あるいは悉有しつゆう仏性ぶつしやうの理りを談だんじ、宗しゆ宗じゆうに究竟くきやう至極しごくの義ぎを争あらそい、各おのおのに甚深正じんじんしやう義ぎの宗しゆうを論ろんず。みなこれ經論きやうろんの实語じつごなり。そもそもまた如来にやらいの金言きんげんなり。あるいは機きを調ととえてこれを説とき、あるいは時ときを鑑かがみてこれを教おしえたまえり。いづれか浅あさくいづれか深ふかき。ともに是非ぜひを弁わえ難がたし。かれも教きやうこれも教きやう、互たがいに偏執へんしゆを懷いだく事ことなかれ。説せつのごとく修行しゆぎやうせばみなことごと

とく生死を過度すべし。法のごとく修行せばともに同じく菩提を証得すべし。修せずして徒に是非を論ず。譬えば目しいたる人の色の浅深を論じ、耳しいたる人の声の好悪をいわんがごとし。ただすべからく修行すべし。いずれも生死解脱の道なり。しかるに今かれを学する人はこれを嫉み、これを誦する人はかれを誘る。愚鈍の者これがために惑い易く、浅才の身これがために弁え難し。たまたま一法に趣きて功を積まんとすればすなわち諸宗の争互いに来る。広く諸教に亘りて義を談せんと思えば、一期の命暮れ易し。

かの蓬萊方丈瀛州というなる三つの山にこそ不死の薬はありと聞け。彼を服してまれ、命を延べて漸漸に習わばやと思えども、尋ぬべき方も覚えず。唐に秦皇漢武と聞こえし御門、これを聞きて尋ねに遣わしたりしかども、童男卯女、舟の中にして年月を送りき。彭祖が七百歳の法、昔語にて今の時に伝え難し。曇鸞法師と申せし人こそ仏法の底を究めたりし人の、命は朝を期し難しとて、仏法を習わんがために長生の仙の法をば伝えたまひけれ。時に菩提流支と申す三蔵ましましき。曇鸞かの三蔵の御前に詣でて申したまうようは「仏法の中に長生不死の法、この土の仙経に過ぎたるありや」と問いたまひければ、三蔵、地に唾を吐きてのたまわく「この方には何処に長生の法あらん。たとい長年を

得て暫らく死なずとも終に三有に輪廻す」とのたまいて、すなわち『観無量寿經』を授けて「大仙の法なり、これによりて修行すればさらに生死を解脱すべし」とのたまいき。曇鸞これを伝えて仙法をたちまちに火に焼きてこれを棄つ。『観無量寿經』によりて浄土の行を記したまいき。その後曇鸞、道綽、善導、懷感、少康等に至るまでこの流れを伝えたまえり。その道をおいて命を延べて大仙の法を取らんと欲うに、また道綽、禪師の『安樂集』にも聖道浄土の二門を立てたまうはこの意なり。その聖道門というは穢土にして煩惱を断じて菩提に至るなり。浄土門というは浄土に生まれてかしくにして煩惱を断じて菩提に至るなり。

今この浄土宗についてこれをいえば、また『観經』に明かすところの業因一つにあらず。三福九品十三定善、その行品に別れて、その業区に連なり。まず定善十三観というは日想、水想、地想、宝樹、宝池、宝楼、華座、像想、真身、観音、勢至、普觀、雜觀これなり。次に散善九品というは、一つには孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業、二つには受持三帰、具足衆戒、不犯威儀、三つには發菩提心、深信因果、誦誦大乘、勸進行者なり。九品はかの三福の業を開してその業因に充つ。具には『観經』に見えたり。総じてこれをい

えは定散二善の中に漏れたる往生の行はあるべからず。これによりてあるいは
 いずれにもあれ、ただ有縁の行に趣きて功を累ねて心に引かん法によりて行を励
 まば、みなことごとく往生を遂ぐべし。さらに疑をなすことなかれ。今暫らく
 自法につきてこれをいわば、まさに今定善の觀門は幽かに連なりて十三あり。
 散善の業因は区々に別けて九品あり。その定善の門に入らんとすれば、すなわ
 ち意馬荒れて六塵の境に馳す。かの散善の門に臨まんとすれば、また心猿遊んで
 十悪の枝に移る。かれを静めんとすれども得ず、これを止めんとすれども能わ
 ず。今下三品の業因を見れば、十悪五逆の衆生、臨終に善知識に遇いて一声十
 声阿弥陀仏の名号を称えて往生すと説かれたり。これなんぞ我らが分にあらざ
 らんや。

かの積の雄俊といひし人は七度還俗の悪人なり。命終わりて後、獄卒閻魔の
 庁庭に率て行きて「南閻浮提第一の悪人、七度還俗の雄俊率て参りてはんべ
 り」と申しければ、雄俊申していわく「我れ在生の時『觀無量壽經』を見しか
 ば、五逆の罪人、阿弥陀仏の名号を称えて極樂に往生すと正しく説かれたり。
 われ七度還俗すといえどもいまだ五逆をば造らず、善根少なしといえども念仏十
 声に過ぎたり。雄俊もし地獄に墮ちば三世諸仏、妄語の罪に墮ちたまうべし」と

高声こうしやうに叫よびしかば、法王ほうおうは理りに折おれて玉たまの冠かぶりを傾かたけてこれを拜おがみ、弥陀みだは誓ちかい
りて金蓮こんれんに乗のせて迎むかへたまいき。いわんや七度しちど還俗げんぞくに及およばざらんをや、いわんや
一形いちぎやう念仏ねんぶつせんをや。「男女なんにょ貴賤きせん、行住ぎやうじゆう坐臥ざがを簡えらばず、時处じしよ諸縁しよえんを論ろんぜず、これ
を修しゆするに難かたからず。乃至ないしり臨終りんじゆうに往生おうじゆうを願がん求ぐするにその便たよりを得えたり」と楞嚴りやうえんの先
徳とくの書かき置おきたまえる、まことなるかなや。

また善導ぜんどう和尚わうしやうこの『觀經かんぎやう』を釈しやくしてのたまわく「娑婆しやばの化主けしゆ、その請しやうによるが
故ゆえに、広ひろく淨土じやうどの要門やうもんを開ひらき、安樂あんらくの能人のうにん、別意べつちの弘願ぐがんを顕あらわす。その要門やうもんとい
は、すなわちこの『觀經かんぎやう』の定散じやうさん二門にもんこれなり。定じやうはすなわち慮おもいを息めめてもて
心こころを凝こらし、散さんはすなわち悪あくを廢はいして善ぜんを修しゆす。この二行にぎやうを廻めぐらして往生おうじゆうを求め
願ねがうなり。弘願ぐがんといは『大經だいきやう』に説とくがごとし。一切いっさい善惡ぜんあくの凡夫ぼんぶの生むまるること
を得うる者もの、みな阿彌陀あみだ仏ぶつの大願業力だいがんごうりきに乗じゆうじて増上ぞうじやう縁えんとせずといふことなし。ま
た仏ほとけの密意みつぎ弘深ぐじんにして、教文きやうもん暁あり難がたし。三賢さんげん十聖じしやうも測はかりて窺うかがうところにあらず。
いわんや我信われしん外げの輕毛きやうもうなり、さらに旨趣ししゆを知らんや。仰あおいで惟おもんみれば釈迦しやかはこの
方ほうにして發遣はつせんし、弥陀みだはかの国くにより來迎らいじゆうしたまう。此こゝに遣やり彼かに喚かばう、あに去き
らざるべけんや」といへり。

しかれば定善じやうぜん散善さんぜん弘願ぐがんの三門さんもんを立てたまへり。その弘願ぐがんといは『大經だいきやう』にい

わく「もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に、信樂して、我が國に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とを除く」といえり。善導釈していわく「もし我れ成仏せんに、十方の衆生、我が名号を稱すること下十声に至るまで、もし生ぜずんば正覺を取らじ。かの仏、今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生することを得」云云。『觀經』の定散兩門を説き終わりて「仏、阿難に告げたまわく、汝好くこの語を持せよ。この語を持せよとはすなわちこれ無量壽仏の名を持せよとなり」云云。これすなわち前の願の意なり。また同じき『經』の「眞身觀」には「弥陀の身色金山のごとし。相好の光明十方を照らす。ただ念仏のみ有て光摂を蒙る。まさに知るべし、本願最も強しと爲」云云。またこれ前の弘願の故なり。『阿弥陀經』にいわく「少善根福徳の因縁を以ちて、かの國に生ずることを得べからず。もし善男子、善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること、もしは一日、もしは二日、乃至七日、一心不乱なれば、その人命終の時、心顛倒せず、すなわち往生することを得」云云。次の文に「六方に各恒河沙の仏ましまして、広長舌相を出して遍く三千大千世界に覆いて、誠実の事なり、信ぜよと証誠したまえ

り」。これまた前の弘願の故なり。また『般舟三昧經』にいわく「跋陀和菩薩、阿弥陀に問いていわく、いかなる法を行じてかかの国に生まるべきと。阿弥陀仏のたまわく、我が国に來生せんと欲わん者は常に御名を念じて休むことなかれ。かくのごとくして我が国に來生することを得」とのたまえり。これまた弘願の旨をかかへての仏みずからのたまえり。

また五台山の『大聖竹林寺の記』にいわく、法照禪師、清凉山に登りて大聖竹林寺に至る。ここに二人の童子あり、一人をば善財といい、一人をば難陀という。この二人の童子、法照禪師を導きて寺の内にいれて漸漸に講堂に至りて見れば、普賢菩薩無数の眷属に圍遶せられて坐したまえり。文殊師利は一万の菩薩に圍遶せられて坐したまえり。法照礼して問いたてまつりていわく「未法の凡夫はいずれの法をか修すべき」。文殊師利答えてのたまわく「汝すでに念仏せよ、今正しくこれ時なり」と。法照また問いていわく「まきにいずれをか念すべき」と。文殊またのたまわく「この世界を過ぎて西方に阿弥陀仏まします。かの仏まきに願深くまします。汝まきに念ずべし」と。大聖文殊、法照禪師に目の当たりのたましい事なり。すべて広くこれをいえば諸教に遍く修せしめたる法門なり。具に挙ぐるに暇あらず。

しかるをこのごろ念仏の世に弘まりたるによりて仏法失せなんとすと諸宗の学者難破を致すによりて、人多く念仏の行を廢すと聞こゆ。いまだ心得ずはんべり。仏法はこれ万年なり。失わんと思つとも、仏法擁護の諸天善神護りたまふ故に、人の力にては叶うべからず。かの守屋の大臣が仏法を破滅せんとせしかども、法命いまだ尽きずして今に伝わるがごとし。いわんや無智の道俗在家の男女の力にて念仏を行ずるによりて、法相三論も隠没し天台華嚴も廢する事、なじかはあるべき。念仏を行ぜずして居たらばこの輩は一宗をも興隆すべきかは。ただ徒に念仏の業を廢したるばかりにてまたくそれ諸宗の願をも探るべからず。しかればこれ大きな損にあらずや。諸宗の深き流れを汲む南都北京の学者、兩部の大法を伝えたる本寺本山の禅徒、百千万の念仏世に弘まりたりとも本宗を改むべきにあらず。

また仏法失せなんとすとて仏法を廢せば、念仏はこれ仏法にあらずや。譬へば虎狼の害を逃げて師子に向かいて走らんがごとし。余行を謗じ、念仏を謗せん、同じくこれ逆罪なり。虎狼に害せられん、師子に害せられん、ともに必ず死すべし。これをも謗すべからず、かれをも嫉むべからず、ともにみな仏法なり。互いに偏執する事なかれ。『像法決疑經』にいわく「三学の行人、互いに毀謗して

地獄に入るに疾き矢のごとし」といえり。また『大論』にいわく「自法を愛染する故に他人を毀皆すれば、持戒の行人も地獄の苦を脱れず」といえり。また善導和尚のたまわく

世尊説法の時まさに了らんとす。慇懃に弥陀の名を付属したまう。

五濁増の時疑謗多く、道俗相簡いて聞くことを用はず。

修行することあるを見ては瞋毒を起し、方便破壊して競いて怨を生ず。

かくのごときの生盲闡提の輩、頓教を毀滅して永く沈淪せん。

大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身を離るることを得べからず

といえり。念仏を修せん者は余行を誘るべからず、誘らばすなわち弥陀の悲願に

背くべき故なり。余行を修せん者も念仏を誘るべからず、また諸仏の本誓に違

が故なり。しかるを今真言止観の窓の前には念仏の行を誘る、一向専念の床の上

には諸余の行を誘る。ともに我我偏執の心をもて義理を立て、互いに各是非の

意に住して会釈をなす。あにこれ正義に契わんや。みなともに仏意に背けり。

次にまた難者のいわく、今來の念仏者私義を立てて、悪業を恐るるは弥陀

の本願を信ぜざるなり、數遍を重ねるは一念の往生を疑うなり、行業をいえは

一念十念に足りぬべし。かるが故に數遍を積むべからず。悪業をいえは四重五

逆なぎやくお生むまるる故ゆえに諸しよ悪あくを憚はばかすべからずといえり。この義ぎまたくしかるべからず。釈尊しやくそんの説せつ法ぽうにも見みえず、善導ぜんどうの釈しやくにもあらず。もしかくのごとく存ぞんぜん者は総そうじては諸しよ仏ぶつの御意みこころに違たがうべし、別べつしては弥陀みだの本願ほんがんに契かなうべからず。その五逆ごぎやく十悪じしやくの衆生じゆじやうの、一念いちねん十念じしゆなんによりてかの国くにに往生おつじやうすといはこれ『観經かんぎやう』の明あきかなる文もんなり。ただし五逆ごぎやくをつく十念じしゆなんを称となえよ、十悪じしやくを犯おかして一念いちねんを申もうせと勸すすむるにはあらず。それ十重じしゆじゆうを持ちて十念じしゆなんを称となえよ、四十八輕しじしゆはちきやうを護まほりて四十願はちがんを憑たのむは心こころに深ふかく冀こいねがふところなり。およそいずれの行ぎやうを専もらにすとも心こころに戒行かいぎやうを持ちて浮囊ふのうを護まほるがごとくにし、身みの威儀いぎに油鉢ゆはつを傾かたぶけずは、行ぎやうとして成じやう就じゆせずといふことなし、願がんとして円満えんまんせずといふことなし。しかるを我われらあるいは四重しじゆうを犯おかし、あるいは十悪じしやくを行ぎやうず。かれも犯おかしこれも行ぎやうず。一人ひとりとしてまことの戒行かいぎやうを具ぐしたる者はなし。諸惡しよあく莫まく作さく諸善しよぜん奉行ぶぎやうは三世さんぜの諸佛しよぶつの通戒つうかいなり。善ぜんを修しゆするものは善趣ぜんじゆの報ほうを得え、惡あくを行ぎやうずる者は惡道あくじちゆうの果かを感かんずといふ。この因果いんがの道理だうりを聞きけども聞きかざるがごとし。初めはじていふに能あたわず。しかれども分ぶんに随したがいて惡業あくごうを止とどめよ、縁えんに触ふれて念仏ねんぶつを行ぎやうじ往生おつじやうを期きすべし。惡人あくにんを捨すてられずは、善ぜん人にんなんぞ嫌きらわん。罪つみを恐おそるは本願ほんがんを疑うたがうとこの宗しゆうにまたく存ぞんぜざるところなり。次に一念いちねん十念じしゆなんによりてかの国くにに往生おつじやうすといふは釈尊しやくそんの金言きんげんなり。『觀經かんぎやう』の明あき

らかなる文なり。善導和尚の釈にいわく「下、十声等に至るまで、定んで往生を得、乃至一念も疑心あることなし。故に深心と名づく」といえり。またいわく「行住坐臥に時節の久近を問わず、念念に捨てざる、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるが故に」といえり。しかれば信を一念に生まると取りて行はば一形励むべしと勸むるなり。弥陀の本願を信じて念仏の功を積もり運心年久しくば、なんぞ願力を信ぜずといふべきや。すべて薄地の凡夫弥陀の淨土に生まれん事他力にあらずはみな道絶えたるべき事なり。

およそ十方世界の諸仏善逝、穢土の衆生を引導せんがために、穢土にして正覚を唱え淨土にして正覚を成りて、しかも穢土の衆生を引導せんといふ願を立てたまえり。その穢土にして正覚を唱うれば、随類応同の相を示すが故に、命長からずして疾く涅槃に入りぬれば、報仏報土にして地上の大菩薩の所居なり、未断惑の凡夫は直ちに生まること能わず。しかるを今淨土を莊嚴し仏道を修行するは凡位はもと造悪不善の輩なり、輪転窮まりなからんを引導し破戒浅智の輩の出離の期なからんを哀れまんがためなり。もしその三賢を証し十地を究めたる久行の聖人、深位の菩薩の六度万行を具足し諸波羅蜜を修行して生まるといはば、これ大悲の本意にあらず。

この修因感果の理を大慈大悲の御心の内に思惟して、年序を空に積もりて星霜五劫に及べり。しかるを善巧方便を廻らして思惟したまえり。しかも我別願をもて淨土に居して薄地底下の衆生を引導すべし。その衆生の業力によりて生まるといはば難かるべし、我すべからくは衆生のために永劫の修行を送り僧祇の苦行を廻らして、万行万善の果徳円満し、自覚覚他の覚行窮満してその成就せんところの万徳無漏の一切の功徳をもて我が名号として衆生に称えしめん。衆生もしこれにおいて信を至して称念せば我が願に心えて生まるることを得べし。名号を称えば生まるべき別願を發してその願成就せば仏に成るべきが故なり。この願もし満足せずは永劫を経とも我れ正覚を取らじ。ただし未来惡世の衆生憍慢懈怠にしてこれにおいて信を發す事難かるべし。一仏二仏の説きたまわんに恐らくは疑う心をなさん事を。願わくは我十方諸仏にことごとくこの願を称揚せられたてまつらんと誓いて、第十七の願に「もし我仏を得たらんに、十方の無量の諸仏にことごとく咨嗟して我が名を称せずんば正覚を取らじ」と立てたまいて、次に第十八願の「乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覚を取らじ」と立てたまえり。その旨、無量の諸仏に称揚せられたてまつらんと立てたまえり。願成就する故に六方に各恒河沙の仏ましまして広長舌相を出だして遍く

三千大千世界に覆いて、みな同じくこの事をまことなりと証誠したまえり。善導これを釈してのたまわく「もしこの証によりて生まるることを得ずは、六方の諸仏の舒べたまえる舌、口より出で已りて後、終に口に還り入らずして自然に壞れ爛れん」とのたまえり。これを信ぜざらん者はすなわち十方恒沙の諸仏の御舌を壞るなり。よくよく信ぜずべし。一仏二仏の御舌を壞らんだにもあり、いかにいわんや十方恒沙の諸仏をや。「大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身を離るべからず」とのたまえり。

弥陀の四十八願といは、無三惡趣不更惡趣乃至念仏往生等の願これなり。すべて四十八願の中にいづれの願か一つとして成就したまわぬ願あるべき。願ごとに「不取正覺」と誓いて今すでに正覺を成りたまえる故なり。しかるを無三惡趣の願を信ぜずして、かの国に三惡道ありという者はなし。不更惡趣の願を信ぜずして、かの国に衆生命終わりて後また惡道に更るといふ者はなし。悉皆金色の願を信ぜずして、かの国の衆生は金色なるもあり、白色なるもありという者はなし。無有好醜の願を信ぜずして、かの国の衆生は形よきもあり、悪きもありという者はなし。乃至天眼天耳光明壽命及び得三法忍の願に至るまで、これにおいて疑をなす者はいまだはんべらず。ただ第十八願において念仏往

生の願一つを信ぜざるなり。この願を疑わば余の願をも信ずべからず。余の願を信ぜばこの一願を疑うべけんや。法蔵比丘いまだ仏に成りたまわずといわばこれ謗法になりなにかし。もしまた成りたまえりといわばいかがこの願を疑うべきや。四十八願の弥陀善逝は正覺を十劫に唱えたまえり。六方恒沙の諸仏如来は舌相を三千世界に舒べたまえり。誰かこれを信ぜざるべきや。善導この信を釈してのたまわく「化仏報仏、もしは一もしは多、乃至十方に遍じて光を輝かし、舌を吐きて遍く十方に覆いてこのこと虚妄なりとのたまわんにも、畢竟して一念疑退の心を起さじ」とのたまえり。しかるをいま行者たち異学異見のために容易くこれを破らる、いかにいわんや報仏化仏のたまわんをや。

そもそもこの行を捨てばいずれの行にか趣きたまうべき。智慧なければ聖教を開くに眼暗し、財宝なければ布施を行ずるに力なし。昔波羅奈国に太子ありき。大施太子と申しき。貧人を哀みて蔵を開きて諸の宝を出して与えたまうに、宝は尽くれども貧しき者は尽くべからず。ここに太子、海の中に如意宝珠ありと聞く。海に行きて求めて貧しき民に宝を与えんと誓いて竜宮に行きたまうに、竜王驚き怪しみて「おぼろけの人にはあらず」といいて、みずから向かいて宝の床に据えたとまつり「遙かに来たりたまえるころさし、何事を求めたま

うぞ」と問えば、太子のたまわく「閻浮提の人貧しくて苦しむこと多し。王の髻の中の宝珠を乞わんがために来るなり」とのたまえば、王のいわく「しからば七日ここに止まりて我が供養を受けたまえ。その後宝を奉らん」という。太子、七日を経て珠を得たまひぬ。竜神そこより送りたてまつる。すなわち本國の岸に至りぬ。ここに諸の竜神嘆きていわく「この珠は海中の宝なり。なお取り返してぞよかるべき」と定む。海神人になりて太子の御前に来たりていわく「君、世に希なる珠を得たまえり。疾く我に見せたまえ」という。太子これを見せたまうに奪い取りて海へ入りぬ。太子嘆きて誓いていわく「汝、もし珠を返さずんば海を汲み干さん」という。海神出でて嘲いていわく「汝は最も愚かなる人かな。空の日をば落しもしてん、速き瀬をば止めもしてん、海の水をば尽くすべからず」という。太子のたまわく「恩愛の断え難きをもなお止めんとおも、しやう死の尽くし難きをもなお尽くさんと思ふ。いわんや海の水多しというとも限りあり。もしこの世に汲み尽くさずは世世を経て必ず汲み尽くさん」と誓いて貝の殻を取りて海の水を汲む。誓の心まことなるが故に、諸の天人ごとく来たりて、天の羽衣の袖に包みて鉄圍山の外に汲み置く。太子一度二度貝の殻をもて汲みたまうに、海水十分が八分は失せぬ。竜王騒ぎ狼狽て「我が住処空しくな

りなんとす」と詫びて珠を返し、たてまつる。太子これを取りて都に帰りて諸の宝を降らして、閻浮提の内に宝を降らさざるところなし。苦しきを凌ぎて退せざりしかばこれを精進波羅蜜という。

昔の太子は万里の波を凌ぎて竜王の如意宝珠を得たまえり。今の我らは二河の水火を分けて弥陀本願の宝珠を得たり。かれは竜神の悔しがために奪われ、これは異学異見のために奪わる。かれは貝の殻をもて大海を汲みしかば六欲四禪の諸天来たりて同じく汲みき。これは信の手をもて疑謗の難を汲まば六方恒沙の諸仏来たりて与したまうべし。かれは大海の水ようやく尽きしかば竜宮の薨現れて如意宝珠を返し取りき。これは疑難の波ごとく尽きなば謗家の薨現れて本願の宝珠を返し取るべし。かれは返し取りて閻浮提にして貧窮の民を哀れみき。これは返し取りて極楽に生まれて薄地の輩を導くべし。願わくは諸の行者、弥陀本願の宝珠をいまだ奪い取られざらん者は深く信心の底に納めよ。もしすなわち取られたらん者は速やかに深信の手をもて疑謗の波を汲め。宝を捨てて手を空しくして帰る事なかれ。

いかなる弥陀か十念の悲願を發して十方の衆生を撰取したまう。いかなる我らか六字の名号を称えて三輩の往生を遂げざらん。永劫の修行はこれ誰がため

ぞ。功を未来の衆生に譲りたまう。超世の悲願はまた何の料ぞ。こころざしを末法の我らに送りたまう。我らもし往生を遂ぐべからずは仏あに正覚を成りたまうべしや。我らまた往生を遂げまじや。我らが往生は仏の正覚により、仏の正覚は我らが往生による。若不生者の誓いこれをもて知り、不取正覚のことは限りあるをや。云云

ある人に示すことば 第二

一つ、尿管の時西に向かうべからず。また西を後にすべからず。北、南に向かうべし。大方、内内居たらんにも、打ち伏さんにも、必ず西に向かうべし。もしゆゆしく便宜悪き事ありて西を後にする事あらば、心の内に、我が後は西なり、阿弥陀仏のおわします方なり、ただ今悪様にて向かわねども心をだにも西方へ遣りつれば、そぞろに西に向かわで極樂を思わぬ人に比ぶれば、それに勝るなり。

一つ、孝養の心をもて父母を重くし思わん人は、まず阿弥陀仏に預けまいらすべし。我が身の人となりて往生を願ひ念仏する事は、偏に我が父母の養い立たればこそあれ。我が念仏しそろう功を哀れみて我が父母を極樂へ迎えさせおわしまして罪をも滅しましませと思わば、必ず必ず迎え取らせおわしませお

なり。されば唐土に妙雲といひし尼は幼くして父母に後れたりけるが、三十年ばかり念仏して父母を祈りしかば、ともに地獄の苦を改めて極樂へ参りたりけるなり。

一つ、善導和尚の『往生礼讃』に本願を引きていわく「もし我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称すること下十声に至るまで、もし生ぜずんば正覚を取らじ。かの仏、今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生することを得一文。」

この文を常に口にも称え心にも浮かべ眼にも当てて、弥陀の本願を決定成就して極樂世界を莊嚴し立てて、御目を見回わして我が名を称うる人やあると御覽じ、御耳を傾けて我が名を称する者やあると、夜昼聞し召さるるなり。されば一称も一念も阿弥陀に知られまいらせずという事なし。されば撰取の光明は我が身を捨てたまう事なく、臨終の来迎は虚しき事なきなり。この文は四十八願の眼なり、肝なり、神なり。四十八字に結びたる事はこの故なり。よくよく身を清め手をも洗いて、数珠をも取り袈裟をも掛くべし。不浄の身にて持仏堂へ入るべからず。この世の主なんどをだにも敬い恐るる事にてあるに、まして無上世尊の諸の大菩薩にも敬われたまえるに、我らが身にいかでか無礼にも当たり

まいらすべき。三界の諸天も頭を傾けたまう、いかにいわんや我らが身をや。また罪を恐るるは本願を軽しむるなり、身を慎みてよからんとするは自力を励むなりという事は、ものも覚えぬ浅ましき僻事なり。ゆめゆめ耳にも聞き容るべからず。露塵ばかりも用いまじき事なり。始め浄土三部経より唐土日本の人師の御作の中にも全くなき事どもを心に任せて我が思うさまに悪からんとてい出したることなり。一定として三悪道に墮ちんずる事なり。一代聖教の中にふつとなき事なり。五逆十悪の罪人の臨終の一念十念によりて来迎に預かる事は、その罪を悔い悲しみて助けおわしませと思いて念仏すれば弥陀如来願力を起して罪を滅し来迎しますますなり。本願のままに書いて参らせそうろう。このままに信じて御念仏そうろうべし。かまえてかまえて貴き念仏者にておわしませ。あなかしこ、あなかしこ。

津戸三郎へ遣わす御返事 第二

御文詳しく承りそうらいぬ。念仏の事召し問われそうらわんには、なじかは詳しき事をは申させたまうべき。実にもいまだ詳しくも習わせたまわぬ事にてそうらえば専修雑修の間の事は詳しき沙汰そうらわずとも。「いかようなる事ぞ」

と召し問われそうらわば「法門の詳しき事は知りそうらわず。御京上の時承り渡りそうらいて、聖のもとへ罷りそうらいて『後世の事をばいかがしそうらうべき、在家の者などの後生助かるべき事は何事かそうららん』と問いそうらいしかば、聖の申しそうらいし様は『大方生死を離るる道、様様に多くそうらえども、その中にこのごろの人の生死を出ずる道は極楽に往生するより外には異道は叶い難き事なり。これ仏の衆生を勧めて生死を出させたまうべき一つの道なり。しかるに極楽に往生する行また様様に多くそうらえども、その中に念仏して往生するより外には異行は叶い難き事にてあるなり。その故は念仏はこれ弥陀の一切衆生のためにみずから誓いたまいたりし本願の行なれば、往生の業にとりては念仏にしく事はなし。されば往生せんと欲わば念仏をこそはせめ』と申しそうらいき。『いかにいわんやまた最下の者の法門をも知らず智慧もなからん者は、念仏の外には何事をしてか往生すべきという事なし。我れ幼くより法門を習いたる者にてあるだにも、念仏より外に何事をして往生すべしとも覚えず。ただ念仏ばかりをして弥陀の本願を憑みて往生せんとは思いてあるなり。まして最下の者などは何事かあらん』と申されしかば、深くその由を憑みて念仏をばつまつりそうらうなり」と申させたまうべし。

またこの念仏を申す事は、ただ我が心より弥陀の本願の行なりと解りて申す事にもあらず。唐の世に善導和尚と申しそらいし人、往生の行業において専修雑修と申す二つの行を分かちて勧めたまえる事なり。専修といふは念仏なり、雑修といふは念仏の外の行なり。専修の者は百人は百人ながら往生し、雑修のものは千人が中に僅かに一二人あるなり。唐土にまた信仲と申す者こそこの旨を記して『専修正業文』という文を造りて唐土の諸人を勧めたれ。その文は浄勝房なんどのもとにはそらうらん。それを持ちて参らせたまうべし。

「また専修につきて五種の専修正行という事あり。この五種の正行につきてまた正助二行を分かてり。正業といふは五種の中に第四の念仏なり、助業といふはその中の四つの行なり。今決定して浄土に往生せんと欲わば、専修二修の中には専修の教によりて一向に念仏をすべし。正助二業の中には正業の勧めによりて二心なくただ第四の称名念仏をすべしと申しそらいしかば、詳しく旨、深き心をは知りそらわらず、さては念仏はめでたき事にこそあるなれと信じそらいて申しそらうらばかりにそらうら。件の人の善導和尚と申す人は打ちある人にもそらわらず。阿弥陀仏の化身にておはしましそらうらなれば教え勧めさせたまわん事よも僻事にてはそらわらじ、と深く信じて念仏はつかまつりそらうらな

り。その造らせたまいてそうろうなる文ども多くそうろうなれども、文字も知り
 そうらわぬものにてそうらえば、ただ心ばかりを聞きそうらいて、後生や助かり
 そうろう、往生やしそうろうとて申しそうろう程に、近き者ども見羨みそうらい
 て少少申す者どもそうろうなり」とこれ程に申させたまうべし。

なかなか詳しく申させたまわば過ちもありなんどして、悪しき事もこそそうら
 えと覚えそうろうはいかがそうろうべき。「様様に難答を記して」とそうらえど
 も、時に臨みてはいかなることほどもかそうらわんずらん。書きて参らせてそう
 らわんも悪くそうらいぬべくそうろう。ただよくよく御計らいそうらいて、早晚
 よき様にこそは計らわせたまいそうらわめ。また「念仏申すべからず」と仰せら
 れそうろうとも、往生にこそろざしあらん人はそれによりそうろうまじ。「念仏
 よくよく申せ」と仰せられそうろうとも、道心なからん者はそれによりそうろう
 まじ。とにかくにつけてもこの度往生しなんと、人をば知らず御身に限りては思
 召すべし。

わざと遙遙と人上げさせたまいてそうろうこそかえすがえす下人も不便にそう
 らえ。なおなお召し問われそうらわん時には、これより百千申してそうらわん
 事は時にも契いそうろうまじければ、無益の事にてそうろう。計らいてよきよう

に早晩そうばんに随したがいて申もうさせたまわんによも僻事ひがごとはそうらわじ。真名まな仮名かなにひろく書かきて
参まらせそうらわんは以もての外ほかに、広ひろく文もんを作りつくそうらわんずる事ことにてそうらえば
にわかまにすべき事ことにてもそうらわす。それはまたなかなか悪あしき事ことにてもそうら
いぬべし。ただ「いと子細しさいは知しりそうらわす、これ程ほどに聞ききて申もうしそうらうな
り」と申もうさせたまいそうらわんに、心こころそうらわん人は、さりとも心こころ得とろえそうらい
なん。また道心どうしんなからん人ひとはいかに道理どうり百ひやく千せん万まん分わかすともよも心こころ得とろえそうらわじ。
「殿とのは道理どうり深ふかくして、僻事ひがごとおわしまさぬ事ことにてそうらう」と申もうしあいてそうらえ
ば、これら程ほどに聞きこし召めさんに「念仏ねんぶつ僻事ひがごとにてありけり、いまはな申もうしそ」と仰おお
せらるる事ことはよもそうらわじ。さらざらん人ひとはいかに申もうすとも思おもうとも、無む益やくの
事ことにてこそそうらわんずれ。何事なにごとも御文おんふみには尽つくし難がたくそうらう。あなかしこ、
あなかしこ

十月十八日
じゅうがつじゅうはちにち

おぼつかなく思おもいまいらせつる程ほどに、この御文おんふみかえすがえす悦よろこびて承うけたまわりそう
らいぬ。さても専修念仏せんじゆねんぶつの人ひとは世よに有あり難がたき事ことにてそうらうに、その一国いっごくに三
十じゅう余人よにんまでそうらうらんこそまめやかにあわれにそうらえ。京きやう辺へんなんどの、常つね
に聞きき習ならいかたわらをも見習みならいそうらいぬべきところにてそうらうだにも、思おもい

也 仏心者大慈悲是

切りて専修念仏をする人は有り難き事にてこそそうらうに、道綽禪師の併州と申しそうらうところこそ一向念仏の地にてはそうらうに、専修念仏三十余人は世に有り難く覚えそうらう。偏に御力、また熊谷入道などの計にてこそそうらうなれ。それも時の至りて往生すべき人の多くそうらうべき故にこそそうらうなれ。縁なき事は、わざと人の勧めそうらうにだにも叶わぬ事にてそうらうに、子細も知らせたまわぬ人などの仰せられんによるべき事にてこそそうらわぬに、もとより機縁純熟して時至りたる事にてそうらえばこそ、さほどに専修の人などはそうらうらめと押し量りあわれに覚えそうらう。

ただし無智の人にこそ機縁に随いて念仏をば勧むる事にてはあれと申しそうらうなる事は諸の僻事にてそうらう。阿弥陀仏の御誓には、有智無智をも簡ばず、持戒破戒をも嫌わず、仏前仏後の衆生をも簡ばず、在家出家の人をも嫌わず、念仏往生の誓願は平等の慈悲に住して発したまいたる事にてそうらえば、人を嫌うことは全くそうらわぬなり。されば『観無量寿経』には「仏心とは大慈悲是なり」と説きてそうらうなり。善導和尚この文を承けては「この平等の慈悲をもて遍く一切を撰す」と釈したまえるなり。「一切」のことは広くして漏るる人そうらうべからず。釈迦の勧めたまうも悪人善人愚人も等しく念仏すれば往生す

と勧めたまえるなり。

されば念仏往生の願はこれ弥陀如来の本地の誓願なり。余の種種の行は本地の誓にあらす。釈迦如来の種種の機縁に随いて様様の行を説かせたまいたる事にてそうらえば、釈迦も世に出でたまう意は弥陀の本願を説かんと思召す御意にてそうらえども、衆生の機縁人に随いて説きたまう日は、余の種種の行をも説きたまうは、これ隨機の法なり。仏のみずからの御意の底にはそうらわす。されば念仏は弥陀にも利生の本願、釈迦にも出世の本懐なり。余の種種の行には似ずそうらなり。これは無智の者なればというべからず。また要文の事書て参らせそうらべし。また熊谷入道の文はこれへ取り寄せてそうらいて、直すべき事のそうらえば、その後書きて参らせそうらべし。何事も御文に申し尽くすべくもそうらわす。後の便宜にまたまた申しそうらべし。

九月廿八日

まず聞こし召すままに急ぎ仰せられてそうらう御ころざし申し尽くし難くそうらう。この例ならぬ事は事柄は難しき様にそうらえども、当時大事にて、今日明日左右すべき事にてはさりながらもそうらわぬに、年ごろの風邪の積もり、この正月に別時念仏を五十日申してそうらいしに、いよいよ風邪を引きそうらい

て二月にの十日がごろより少し口の乾くく様に覺おぼえそうらいしが、二月にの二十日はは五十日にになりそうらいしかば、それまでと思おもいそうらいてなおお強しいてそうらいし程ほどに、その事ことが勝まさりそうらいて水みづなんど飲のむ事ことになり、また身みの痛いたくそうろう事ことなんどのそうらいしが、今日きょうまで病やみも遣やりそうらわず、長なが引びきてそうらえども、またただ今いまいかなるべしとも覺おぼえぬ程ほどの事ことにてそうろうなり。醫師いしの大事だいじと申もうしそうらえば、灸やいとう二度ふたし湯ゆにて茹ゆでそうろう。また様よう様の唐からの薬くすりども食たべなんどしてそうろう氣けにや。この程ほどは塵ちりばかりよき様ようなる事ことのそうろうなり。左さう右なくなく上のるべきなんど仰おほせられてそうろうこそ世よにあわれにそうらえ。さ程ほど遠とほくそうろうほどには、たといいかなる事ことにても上のりなんどする御事おんことはいかでかそうろうべき。いづくにても念ねん仏ぶつして互たがいに往生おうじようしそうらいなんこそめでたく永ながき計はかりごとにてはそうらわめ。何事なにことも御文おんかみには尽つくし難がたくそうろう。またまた申もうしそうろうべし。

四月しがつ廿にじゅう六日にち

私わたくしにいわく、これは命いのちを惜おしむ御療ごりょうじ治ちにはあらず。御身おんみ穩おだしくして念ねん仏ぶつ申もうさせたまわんがためなり。下卷げかんの『用心抄ようじんしょう』の終おわりを見合みあわすべし。

ある女房に示す法語 第四

三心

念仏行者の存じそうろうべき様は、後世を怖れ往生を願いて念仏すれば、終る時必ず来迎せさせたまう由を存じて念仏申すより外の事そうらわす。三心と申しそうろうも、総ねて申す時はただ一つの願心にてそうろうなり。その願う心の偽らず飾らぬ方をば至誠心と申しそうろう。この心まことに念仏すれば臨終に来迎すという事を一念も疑わぬ方を深心とは申しそうろう。この上我が身もかの土へ生れんと思ひ行業をも往生のためと向くるを廻向心とは申しそうろうなり。この故に願う心偽らずして実に往生せんと思ひそうらえば、おのずから三心は具足する事にてそうろうなり。

来迎

そもそも中品下生に來迎のそうらわぬ事はあるまじければ説かれぬにてはそうらわす。九品往生に各みなあるべき事の略せられてなき事もそうろうなり。善導の御心は三心も品品に亘りてあるべしと見えてそうろう。品品ごとに多くの事そうらえども、三心と來迎とは必ずあるべきにてそうろうなり。往生を願わん者は必ず三心を発すべきにてそうらえば、上品上生にこれを説きて、余の品品をもこれに準えて知るべしと見えてそうろう。また我ら戒品の船筏も破れ

たれば生しやうじ死だいの大海だいかいを度わたるべき縁えんもそうらわず、智慧ちえの光ひかりも曇くもりて生しやうじ死だいの闇やみを照て
らし難がたければ、聖道しやうどうの得道とくどうにも漏もれたる我われらがために施ほどこしたまう他力たうりきと申もうそ
うろうは、第十九だいじゅうくの来迎らいごうの願がんにてそうらえば、文もんに見みえずそうろうとも必かならず来らい
迎ごうはあるべきにてそうろうなり。ゆめゆめ御疑おんうたがいそうろうべからず。あなかしこ、
あなかしこ。源空げんくう

拾遺しゅうい黒谷くろたに語録ごろく 卷中かんちゆう

拾遺黒谷語録卷下

上漢語中
下和語

厭欣沙門了惠集録

念仏往生義 第一

東大寺十問答 第二

御消息 第二 四通

往生用心 第四

念仏往生義 第一

念仏往生

念仏往生と申す事は、弥陀の本願に「我が名号を称えん者、我が国に生まれずといわば正覚を取らじ」と誓いてすでに正覚を成りたまえるが故に、この名号を称うる者は必ず往生する事を得。この誓を深く信じて乃至一念も疑わざる者は、十人は十人ながら生まれ、百人は百人ながら生まる。念仏を修すといえども疑う心ある者は生まれざるなり。世間の人の疑に種種の故を出だせり。あるいは我が身罪重ければたとい念仏すとも往生すべからずと疑い、あるいは念仏すとも世間の営み暇なければ往生すべからずと疑い、あるいは念仏すれども心

猛利ならざれば往生すべからずと疑うなり。これらは念仏の機能を知らずしてこれらの疑いを起せり。

罪障の重ければこそ罪障を滅せんがために念仏をば勤むれ。罪障重ければ念仏すとも往生すべからずとは疑うべからず。譬えば病重ければ薬を用いるがごとし。病重ければとて薬を用いずはその病いつか癒えん。「十悪五逆を造れる者も知識の教えによりて一念十念するに往生す」と説けり。善導は「一声称念するにすなわち多劫の罪を除く」とのたまえり。しかれば罪障の重きは念仏すとも往生すべからずとは疑うべからず。

また善根なければこの念仏を修して無上の功德を得んとす。余の善根多くばたとい念仏せずとも憑む方もあるべし。しかれば善導は「我が身をば善根薄少なりと信じて本願を憑み念仏せよ」と勧めたまえり。「経」に「たび名号を称うるに大利を得とす。すなわち無上の功德を得」と説けり。いかにいわんや念念相續せんをや。しかれば善根なければとて念仏往生を疑うべからず。

また念仏すれども心の猛利ならざる事は末世の凡夫のなれる癖なり。その心の内にまた弥陀を憑む心のなきにしもあらず。譬えば主君の恩を重くする心はあれども、宮仕する時いささか物憂き事のあるがごとし。物憂しといえども恩を知

る心のなきにはあらざるがごとし。念仏にだにも猛利ならずはいずれの行に
 猛利ならん。いずれも猛利ならざれば、なれども一生空しく過ぎば、その終
 りいかん。たとい猛利ならざるに似たれども、これを修せんと思ふ心あるはこ
 ころざしの験なるべし。「好めばおのずから発心す」という事あり。功を積み徳
 を累ぬれば時時猛利の心も出で来るなり。始めよりその心なければとて空しく
 過ぎば、生涯徒に暮れなん事後悔先に立つべからず。なかなづくに善導の御義
 には散動の機を簡ばざるなり。しかれば猛利の心なければとて往生を疑うべか
 らず。

また世間の営み暇なければこそ念仏の行をば修すべけれ。その故は「男女貴賤、
 行住坐臥を簡はず時処諸縁を論ぜず、これを修するに難しとせず。乃至臨終に
 もその便宜を得たること、念仏にはしかず」といへり。余の行はまことに世間忽
 忽の中にしては修し難し。念仏の行に限りては、在家出家を簡はず、有智
 無智をいわず、称念するに便あり。世間の事に障えられて念仏往生を遂げざ
 るべからず。ただし詮ずるところ無道心の致すところなり。さればとて世間をも
 捨てざるもの故世間に憚りて念仏せずは、我が身に憑むところなく心の内に募る
 ところなし。受け難き人身を受け遇い難き仏法に遇えり。無常念念に至り、老

受難き人身を受け遇い難き仏法に遇えり。無常念念に至り、老

少極めて不定なり。病来らん事予ねて知らず。生死の近づく事、誰か覚えん。最も急ぐべし、励むべし。

念仏に三心を具すといえるもこれらの理をば出でず。三心といは、一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向發願心なり。至誠心といは真実の心なり。往生を願ひ念仏を修せんにも、心の底より思い立ちて行ずるを至誠心という。心に思わざる事を外相ばかりに現すを虚仮不実というなり。心の中にまた再び生死の三界に歸らじと思ひ、心の中に淨土に生まれんと欲ひて念仏すれば往生すべし。この故にはその相も見えざるが往生する事あり、外にその相見ゆれども往生せざるもあり。ただ心につらつら有為無常のありさまを思ひ知りてこの身を厭ひ念仏を修すれば、自然に至誠心をば具するなり。深心といは信心なり。我が身は罪惡生死の凡夫なりと信じ、弥陀如来は本願をもて必ず衆生を引接したまうと信じて、疑わず念仏せん者生まれずは正覺を取らじと誓ひてすでに正覺を成りたまえば、称念の者必ず往生すと信ずれば、自然に深心をば具するなり。廻向發願心というは修するところの善根を極樂に廻向して彼に生ぜんと願う心なり。別の義あるべからず。三心といえる名は各別なるに似たれども詮ずるところはただ「一向專念」といえる事あり。一筋に弥陀を憑み念仏を修して余の事を雜

一向專念

えざるなり。

その故は寿命の長短といい、果報の深淺といい、宿業に報えたる事を知らずして徒に仏神に祈らんよりも、一筋に弥陀を憑みて一心なければ不定業をば弥陀も転じたまえり、決定業をば来迎したまうべし。無益のこの世を祈らんとて大事の後世を忘る事はさらに本意にあらず。後生のために念仏を正定の業とすれば、これを聞きて余の行を修すべきにあらざれば一向專念なれとは勸むるなり。

善人にして念仏を修す

ただし念仏して往生するに不足なしといて、悪業をも憚らず、行すべき慈悲をも行ぜず、念仏をも励まざらん事は、仏教の掟に相違するなり。譬えば父母の慈悲は善き子をも悪しき子をも育めども、善き子をば悦び、悪しきをば嘆くがごとし。仏は一切衆生を哀れみて善きをも悪しきをも度したまえども、善人を見ては悦び悪人を見ては悲しみたまえるなり。よき地によき種を播かんがごとし。かまえて善人にしてしかも念仏をも修すべし。これを真実に仏教に随う者というなり。詮ずるところ常に念仏して往生に心を懸けて仏の引接を期して、病に臥し死に及ぶべからんに、驚く心なく往生を望むべきなり。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

東大寺十問答 第二 俊乘房問う

一、問う、釈迦一代の聖教をみな浄土宗に摂めそうろうか、また『三部経』に局りそうろうか。

答う、八宗九宗みないずれをも我が宗の中に一代を摂めて聖道浄土の二門とは分つなり。聖道門に大小あり、権実あり。浄土門に十方あり、西方あり。西方門に雑行あり、正行あり。正行に助行あり、正定業あり。かくして聖道は難し、浄土は易しと釈し入るるなり。宗を立てる趣も知らぬ者の『三部経』に限るとはいふなり。

念仏は本願

二、問う、正雑二行、ともに本願にてそうろうか。

答う、念仏は本願なり。十方三世の仏菩薩に捨てられたる似非者を助けんとて五劫まで思惟し、六道の苦に譲り、これを便にて済わんと支度したまえる本願の名号なり。ゆめゆめ雑行本願というものは仏の五智を疑いて辺地に留まるなり。見仏聞法の利益にしばしば漏るるものなり。これは誑惑の者の道心もなきが山寺法師などに誉められんとて、仏意をば顧みずいい出せる事なり。

三心具足

三、問う、三心具足の念仏者は決定往生か。

答う、決定往生するなり。三心に智具の三心あり、行具の三心あり。智具の三心というは、諸宗修学の人、本宗の智をもて信を取り難きを、経論の明文を出し解釈の趣を談じて、念仏の信を取らしめんとて説きたまえるなり。行具の三心というは、一向に帰すれば至誠心なり、疑心なきは深心なり、往生せんと思うは廻向心なり。かるが故に一向念仏して疑う思なく往生せんと思うは行具の三心なり。五念四修も一向に信する者には自然に具するなり。

四、問う、念仏は必ず念珠を持たずとも苦しかるまじくせうろうか。

答う、必ず念珠を持つべきなり。世間の歌を歌い舞いを舞う所ら、その拍子に従うなり。念珠を博士にて舌と手とを動かすなり。ただし無明を断ぜざらん者は妄念起るべし。世間の客と主のごとし。念珠を手取る時は妄念の数を取らんとは約束せず、念仏の数取らんとて念仏の主を据えつる上は、念仏は主、妄念は客なり。さればとて心の妄念を許されたるは過分の恩なり。それにあまさえ口に様様の雑言をして念珠を繰り越しなんどする事、ゆゆしき僻事なり。

五、問う、この大仏かく仰ぎまいらせてせうろうはこの大仏の御計にて浄土にも送り着けさせたまうべくせうろうか。

答う、この事沙汰の外的事なり。三宝を立つるに三あり。一つに一体三宝とい

うは法身の理の上に三宝の名を立つるなり。万法みな法身より出生するが故なり。二つに別相三宝というは十方の諸仏は仏宝なり、その智慧及び所説の経教は法宝なり、三乗の弟子は僧宝なり。もし大仏迎えたまわば三宝の次第も乱るべし。その故は画像木像は住持の仏宝なり、書き付けたる経巻は法宝なり、画像もくぞうの三乗は僧宝なり。住持と別相と最も分別せらるるべし。なかんずくに本尊は娑婆に止りて行者は西方に去らん事、存の外的事なり。ただし浄土の仏のゆかしさにその形を造りて真仏の想をなすは功德を得る事なり。

六、問う、有智の人の世の常ならんと、無智の人の外に道心ありと見えそうらわんと、いづれにてかそうろうべき。

答う、小智の者の道心ながらんは、無智の人の道心あらんには千重万重の劣なり。かるが故に無智の人の念仏は本願なれば往生すべし。小智の者の道心ながらんは、あるいは不浄説法、あるいは虚説人師にあり。決定、地獄に墮つべし。ただし無智の人の道心は僻事をまことと思ひて、怖るまじき事をば怖れ、怖るべき事をば怖れぬなり。大智の人の道心ながらんは道を知りて易く行く人なり。盲目の人を明眼の人に譬えん事、浅ましき事なり。道心同じ事ならば小智の者はなお無智の人に万億倍過ぐべきなり。無智の人の道心は侘びてがてらの事なり。

撰取の益

撰取の光明

七、問う、念仏申す人は必ず撰取の益に預かりそうろうか。

答う、しかなり。

八、問う、撰取の光明は一度照らしてはいつも不退なると申す人のそうろうは

一定にてそうろうか。

答う、この事大きな僻事なり。念仏の故にこそ照らす光の、念仏退転して後

は何者を便にて照らすべきぞ。さようにあるならば念仏一遍申さぬ者やはある。

されども往生する者は少く、せざる者は多き事、現証誰か疑わん。

九、問う、本願には十念、成就には一念とそうろうは平生にてそうろうか、

臨終にてそうろうか。

答う、去年申しそうらいき。聖道にはさように一行を平生にしつれば罪即時

に滅して、後にまた相續せざれども成仏すという事あり。それはなお縁を結ば

しめんとて仏の方便して説きたまえる事なり。順次の義にはあらず。華嚴禪門

真言止観なんどの至極甚深の法門こそさる事はあれ。これは衆生もとより懈怠の

ものなれば、疑惑の者一度申し置きて後申さずとも往生する思に住して数遍を退転

せん事は口惜しかるべし。十念は上尽一形に対する時の事なり。遅く念仏に遇

いたらん人は、命約まりて百念にも及ばぬ十念、十念にも及ばぬ一念なり。

一発心已後無有
退転

往生のころご
し

この源空が衣を焼き捨ててこそ麻の縁を滅したるにてはあらめ。これがあらん限りは麻の滅したるにてはなき事なり。過去無始よりこのかた罪業をもて成せる身ももとのごとし、心ももとの心ならば、何をか業成じ罪滅する驗とすべき。罪滅する者は無生を得、無生を得る者は金色の膚となる。弥陀の願に金色となさんと誓わせたまへども、念仏申す人、誰か臨終以前に金色となる。ただもの賢しからで「二発心已後、無有退転」の釈を仰いで臨終を待つべきなり。

十、問う、臨終來迎は報仏にておわしましそろうか。

答う、念仏往生の人は報仏の迎に預かる。雑行の人人の往生するは必ず化仏の來迎にてそろうなり。念仏も、あるいは余行を雑え、あるいは疑心をいささかも雜うる者は、化仏の來迎を見て仏を隠したてまつるものなり。

建久二年三月十三日東大寺聖人、空上人に問いたてまつる御答なり。

御消息 第三

御文細かに承りそらいぬ。かように申しそろう事の一分の御解をも副え、往生の御ころごさしも強くなりそらいぬべからんには、畏をも憚りも顧みるべきにてそうらわず。幾度も申したくこそそうらえ。まことに我が身の賤しく我

我がこころざし

が心の拙きをば顧みそうらわず。誰誰もみな人の弥陀の誓を憑みて決定往生の道に趣けかしとこそ思いそうらえども、人の心様様にして、ただ一筋に夢幻の憂世ばかりの樂しみ榮を求めて、すべて後の世をも知らぬ人もそうろう。また後世を恐るべき理を思い知りて勤め行う人につきても、かれこれに心を動かして一筋に一行を憑まぬ人もそうろう。またいずれの行にても、もとよりし初め思い初めつる事をば、いかなる理を聞けどももとの執心を改めぬ人もそうろう。また今日はいみじく信を發して一筋に趣きぬと見ゆる程に打ち捨つる人もそうろう。

かくのみそうらいて、まことしく淨土の一門に入りて念仏の一行を専らにする人の有り難くそうろう事は、我が身一つの嘆きとこそは人知れず思いそうらえども、法に依りて人に依らぬ理を失わぬほどの人も有り難き世にてそうろう。おのずから勧め試みそうろうにも、我からの侮らわしさに、申し出る理、捨てらるるにこそなんと思ひ知らるる事にてのみそうろうが心、憂く悲しくそうらいて、これ故はいま一際疾く疾く淨土に生まれて悟を開きて後、急ぎこの世界に還り来たりて神通方便をもて結縁の人をも無縁の者をも、誉むるをも誇るをもみなことごとく淨土へ迎え摂らんと誓を發してのみこそ當時の心をも慰むる事にてそうろうに、この仰こそ我がこころざしも驗ある心地してあまりに嬉しく

そうらえ。その義にてそうらわば同じくはまめやかに実にしく御沙汰そうら

いて、行く末も危うからず往生も頼もしきほどに思召し定めさせおわしますべ

くそうろう。詮じては人の計らい申すべき事にもそうらわす。よくよく案じて

御覽そうらえ。この事に過ぎたる御大事、何事かはそうろうべき。この世の名

聞利養はなかなか申し並ぶるも忌忌しくそうろう。やがて昨日今日眼に遮り耳

に満ちたるはかなさにてそうろうめれば、事新しく申し立つるに及ばず。ただか

えずがえすも御心を静めて思召し計らうべくそうろう。

先には聖道浄土の二門を心得別きて浄土の一門に入らせおわしますべき由

を申しそうらいき。今は浄土門につきて行うべき様を申しそうろうべし。

浄土に往生せんと欲わん人は安心起行と申して心と行との相應すべきなり。

その心というは『観無量寿経』に釈していわく「もし衆生ありてかの国に生

まれんと願わん者は三種の心を発してすなわち往生すべし。何をか三つとする。

一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心なり。三心を具せる者、

必ずかの国に生まる」といえり。

善導和尚この三心を釈していわく「二つに至誠心といは、至といは真なり、

誠といは実なり。一切衆生の身口意業に修せんところの解行、必ず真実心の中に

浄土門

安心起行

三心

至誠心

作すべき事を現さんと欲う。外には賢善精進の相を現じて、内には虚仮をなす事なかれ。内外明暗を簡ばず、必ず真実を須いよ。かるが故に至誠心と名づく」といえり。この釈の意は、至誠心というは真実の心なり。その真実というは、身に振る舞い、口に言い、心に思わん事、みなまことの心を具すべきなり。すなわち内は虚しくして外を飾る心のなきをいう。この心は憂世を背きてまことの道に趣くと覚しき人人の中によくよく用意すべき心ばえてそろうなり。我も人も、いうばかりなき夢の世を執する心の深かりし名残にて、程程につけて名聞利養を僅かに振り捨てたるばかりを有り難いみじき事にして、やがてそれを却りてまた名聞にしなして、この世ざまにも心の丈のうるせきに取り成して、解浅き世間の人の、心の中をば知らず貴がりいみじがるを、これこそは本意なれ、し得たる心地して都の辺をかき離れて、幽なる棲家を尋ねるまでも心の静まらんためをば次にして、本尊道場の荘厳や、籬の内、庭木立などの心細くもあわれならん事がらを人に見え聞かれん事をのみ執する程に、露の事も人の謗りにならん事あらじと営む心より外に思ひさす事もなきようなる心地のみして、仏の誓を憑み往生を願わんなんどのいう事をば思ひ入れず沙汰もせぬ事の、やがて至誠心少けて往生もえせぬ心ばえてそろうなり。またかく申しそうらえば、

一つにこの世の面目をばいかにもありなんとて、人の謗を顧みぬがよきぞと申すべきにてはそうらわず。ただし時に臨みたる譏嫌のために世間の面目を顧みる事はそうらうとも、それをのみ思い入れて往生の障になる方をば顧みぬ様に引きなされそうらわん事のかえすがえすも愚かに口惜しくそうらえば、御身に当たりても御心得させまいらせそうらわんために申しそうらうなり。

この心につきて四句の不同あるべし。一つには外相は貴げにて内心は貴からぬ人あり。二つには外相も内心もともに貴からぬ人あり。三つには外相は貴げもなく内心貴き人あり。四つには外相も内心もともに貴き人あり。四人が中には前の二人はいま嫌うところの至誠心少けたる人なり。これを虚仮の人と名づくべし。後の二人は至誠心具したる人なり。これを真実の行者と名づくべし。されば詮ずるところは、ただ内心にまことの心を発して外相は善くもあれ悪しくもあれ、とてもかくてもあるべきにやと覚えそうらうなり。大方この世を厭わん事も、極楽を欣わん事も、人目ばかりを思わで、まことの心を発すべきにてそうらうなり。これを至誠心と申しそうらうなり。

二つに深心というは、善導釈したまいていわく「これに二種あり。一つには決定して我が身はこれ煩惱を具せる罪惡生死の凡夫なり、善根薄く少くして曠劫

よりこのかた常に三界に流転して出離の縁なしと信すべし。二つにはかの阿彌陀仏、四十八願をもて衆生を摂取したまう、すなわち名号を称すること、下十声一声に至るまで、かの願力に乗じて定めて往生することを得と信じて、乃至一念も疑う心なき故に深心と名づく。また深信というは決定して心を立てて仏教に随いて修行して永く疑を除き、一切の別解別行異学異見異執のために退動傾動せられざるなり」といえり。この釈の意は初には我が身の程を信じ、後には仏の願を信するなり。ただし後の信を決定せんがために初の信心をば挙ぐるなり。その故は、もし初の信心を挙げずして後の信心を出したらましかば、諸の往生を願わん人、たとい本願の名号をば称うとも、みずから心に貪欲瞋恚等の煩惱をも起し、身に十悪破戒等の罪悪をも造りたる事あらば、濫りにみずから身を僻めて却りて本願を疑いそうらいなまし。いまこの本願に十声一声までに往生すというは、おぼろけの人にはあらじ。妄念も起らず、罪も造らず、めでたき人にてぞあるらん。我がごときの輩の、一念十念にてはよもあらじとぞ覚えまし。しかるを善導和尚、未来の衆生のこの疑を殘さん事を鑑みてこの二種の信心を挙げて、我らがごときいまだ煩惱をも断ぜず罪をも造れる凡夫なりとも、深く弥陀の本願を信じて念仏すれば、一声に至るまで決定して往生する旨を釈し

たまえり。この釈しゃくの殊ことに心に染こみていみじく覚おぼえそうろうなり。まことにかくだにも釈しゃくしたまわざらましかば我われらが往生おうじょうは不定ふじょうにぞ覚おぼえましと危あやうく覚おぼえそうらいて、さればこの義ぎを心得こころえわ別わかかぬ人ひとやらん、我が心こころの悪わるければ往生おうじょうは叶かなわじなんどこそは申しあいてそうろうめれ。その疑うたがひのやがて往生おうじょうせぬ心こころにてそうらいけるものを。ただ心こころの善よき悪わるきをも顧かえりみず、罪つみの軽かろき重おもきをも沙さ汰たせず、心こころに往生おうじょうせんと欲おもいて口に南無阿弥陀仏なむあみだぶつと称となえば、声こゑにつきて決定けつじよう往生おうじょうの思おもをなすべし。その決定けつじようの心しんによりてすなわち往生おうじょうの業ごうは定さだまるなり。かく心こころ得うたがれば疑うたがもなし。不定ふじょうと思おもえばやがて不定ふじょうなり、一定いちじょうと思おもえば一定いちじょうする事ことにてそうろうなり。されば詮せんじては、深ふかく信しんずる心しんと申しそうろうは、南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申もうせばその仏ぼんの誓ちかいていかなる過とがをも嫌きらわず一定いちじょう迎むかえたまうぞと、深ふかく憑たのみて疑うたがう心しんの少すこしもなきを申しそうらいけるにそうろう。

また、別解別行べつげべつぎように破やぶられざれと申しそうろうは、解きり異ことに行ぎよう異ことならん人ひとのいわん事ことについて、念ねん仏ぶつをも捨すて、往生おうじょうをも疑うたがう事ことなかれと申しそうろうなり。解きり異なる人ひとと申もうすは天台法相てんたいほつそう等の八宗はつしゆの学生がくしこれなり。行ぎよう異なる人ひとと申もうすは、真しん言止観ごんし等とうの一切いっさいの行者ぎようじやこれなり。これらはみな聖道門しょうどうもんの解行げぎようなり。浄土門じやうどもんの解行げぎように異なるが故ゆゑに別解別行べつげべつぎようと名なづくるなり。あらぬ解きりの人ひとに言いい破やぶらるまじき

理をば、善導細かに釈したまいて、その文広くして具に引くに及ばず。意を取りて申さば、たとい仏来たりて光を放ち舌を出して「煩惱罪惡の凡夫の念仏して一定往生す」といふ事は僻事ぞ、信すべからず」とのたまふとも、それによりて一念も疑う心あるべからず。その故は一切の仏はみな同じ心に衆生をば導きたまうなり。すなわちまず阿弥陀如来、願を發していわく「もし我れ仏に成りたらんに、十方の衆生、我が國に生まれんと願いて、名号を稱うる事下十声一声に至らんに、我が願力に乗じて、もし生まれずんば正覺を取らじ」と誓いたまいて、その願成就してすでに仏に成りたまえり。しかるを釈迦仏、この世界に出でて、衆生のためにかの仏の本願を説きたまえり。また六方に各恒河沙数の諸仏しまして、口口に舌を舒べて三千世界に覆うて無虚妄の相を現じて、釈迦の彌陀の本願を稱めて、一切衆生を勧めて、かの仏の名号を稱うれば定めて往生すと説きたまえるは決定して疑なき事なり、一切衆生みなこの事を信ずべしと証誠したまえり。かくのごとき一切の諸仏一仏も残らず同心に一切凡夫、念仏して決定して往生すべき旨があるいは願を立て、あるいはその願を説き、あるいはその説を証して勧めたまえる上には、いかなる仏のまた来たりて往生すべからずとはのたまふべきぞという理のせうろぞかし。この故に仏

来たりてのたまうとも驚くべからずとは申しそうろうなり。仏なおしかり、いわんや声聞縁覚をや、いかにいわんや凡夫をやと心得つれば、一度もこの念仏往生の法門を聞き開きて信を發してん後は、いかなる人とかく申すとも永く疑う心あるべからずとこそ覚えそうらえ。これを深心と申しそうろうなり。

三つに廻向發願心というは、善導釈していわく「過去及び今生の身口意業に修するところの世出世の善根、及び他の一切の凡聖の身口意業に修せんところの世出世の善根を随喜してこの自他所修の善根をもて、ことごとくみな真実深心の心の中に廻向して、かの国に生まれんと願うなり。また廻向發願心というは、必ず決定 真実の心の中に廻向して生まるることを得る想をなせ。この心深く信じてなおし金剛のごとくして、一切の異見異学別解別行の人のために動乱破壊せられざれ」といえり。この釈の意は、まず我が身につきて、前の世及びこの世に身にも口にも意にも造りたらん功德、みなことごとく極樂に廻向して往生を願うなり。次には我が身の功德のみならず異人のなしたらん功德をも、仏菩薩の作らせたまいたらん功德をも随喜すればみな我が功德となるをもて、ことごとく極樂に廻向して往生を願うなり。すべて我が身の事にも人の事にも、この世の果報をも祈り同じく後の世の事なれども、極樂ならぬ余の淨土に生まれんとも、

もしは都卒とそつに生まれんとも、もしは人中にんちゆう天上てんじやうに生まれんとも、たといかくのご
 とくかれにてもこれにても事ことごとに廻向えきやうする事なくして一向いっやうに極樂ごくらくに往生おうじやうせん
 と廻向えきやうすべきなり。もしこの理ことわりをも思い定めざらん前にこの世よの事ことをも祈いのり、あ
 らぬ方かたへも廻向えきやうしたらん功德く徳をもみな取り返かえして往生おうじやうの業ごうになさんと廻向えきやうすべき
 なり。一切いっさいの善根ぜんこんをみな極樂ごくらくに廻向えきやうすべしと申もうせばとて、念仏ねんぶつに歸きして一向いっやうに念
 仏ぶつ申もうさん人の、故ことさらに余よの功德く徳を作り集あつめて廻向えきやうせよとはそうらわず。ただ過
 ぎぬる方かたに作り置つくきたらん功德く徳をも、もしまたこの後のちなりともおのずから便宜べんぎに
 随したがいて念仏ねんぶつの外ほかの善ぜんを修しゆする事ことのあらんをも、しかしながら往生おうじやうの業ごうに廻向えきやうすべ
 しと申もうす事ことにてそうらうなり。この心しん、金剛こんごうのごとくにして別解べつげ別行べつぎやうに破やぶられざ
 れと申もうしそうらうは、先まきにも申もうしそうらいつる様ように異解いぎの人に教おしえられてかれこ
 れに廻向えきやうする事ことなかれと申もうしそうらう心しんなり。金剛こんごうは破やぶれぬものにてそうらうな
 れば譬たとえに取りて、この心しんの破やぶられぬ事ことも金剛こんごうのごとくなれと申もうしそうらうにやと
 覚おぼえそうらう。これを廻向えきやう発願はつがん心しんとは申もうしそうらうなり。

三心さんしんのありさまおろおろ申もうし開ひらきそうらいぬ。この三心さんしんを具ぐして必ずかなら往生おうじやうす。
 一つの心しんも少かけぬれば生むまるる事ことを得えずと善導ぜんどうは釈しゃくしたまいたれば、往生おうじやうを願ねがわ
 ん人は最もともこの三心さんしんを具ぐすべきなり。しかるにかように申もうしたるには別別べつべつにてこ

とごとしき様なれども、心得解くにはさすがに易く具しぬべき心にてそうろうなり。詮じてはただまことの心ありて深く仏の誓を憑みて往生を願わんずるにてそうろうぞかし。されば浅く深くの替り目こそそうらえども、さほどの心はなにか起さざらんとこそは覚えそうらえ。かようの事は疎く思ふ折には大事に覚えそうろう。取りよりて沙汰すればさすがに易き事にてそうろうなり。よくよく心得解かせおわしますべくそうろう。

ただしこの三心はその名をだにも知らぬ人も空に具して往生し、また細かに習い沙汰する人も却りて少くる事もそうろうなり。これにつきても四句の不同そうろうべし。さはそうらえどもまたこれを心得て我が心には三心具したりと覚えば心強くも覚え、また具せずと覚えば心をも励ましてかまえて具せんと思ひ知りそうらわんはよくこそはそうらいぬべければ、心の及ぶ程は申しそうろうにそうろう。この上さのみは尽くし難くそうらえば止めそうらいぬ。またこの中におぼつかなく思召す事そうらわんをばおのずから見参に入りそうらわん時申し開くべくそうろう。これぞ往生すべき心はえの沙汰にてそうろう。これを安心とは名づけてそうろうなり。

私にいわく、浄土門に入るべき御消息ありけりと見えたり。いまだ尋ね得ず。

ある人のもとへ遣わす御消息

念仏往生は、いかにもして障を出し難ぜんとすれども往生すまじき道理は大方
そうらわぬなり。善根少しといわんとすれば、一念十念漏るる事なし。罪障重
しといわんとすれば、十悪五逆も往生を遂ぐ。人を嫌わんといわんとすれば、
常没流転の凡夫を正しき器とせり。時下れりといわんとすれば、末法万年の
末、法滅已後盛りなるべし。この法はいかに嫌わんとすれども漏るる事なし。た
だ力及ばざる事は、悪人をも時をも簡はず撰取したまう仏なりと深く憑みて我
が身を顧みず、一筋に仏の大願業力によりて善悪の凡夫、往生を得、と信ぜずし
て、本願を疑うばかりこそ往生には大きな障にてそうらえ。

ひとつ、いかさまにもそうらえ、末代の衆生は今生の祈にもなり、まして後生の
往生は念仏の外には叶うまじくそうろう。源空が私に申す事にてはあらず。聖
教の面に鏡を掛けたる事にてそうらえば御覧あるべくそうろうなり。

熊谷入道へ遣わす御返事

御文慶びて承りそうらいぬ。まことにその後おぼつかなくそうらいつるに嬉

しく仰せられてせうろう。但念仏の文、書きて参らせせうろう。御覽せうろうべし。念仏の行はかの仏の本願の行にてせうろう。持戒誦経、誦咒理観等の行はかの仏の本願にあらぬ行にてせうらえば、極樂を欣わん人はまず必ず本願の念仏の行を勤めての上に、もし異行をも念仏にし加えせうらわんと思ひせうらわば、さもつかまつりせうろう。またただ本願の念仏ばかりにてもせうろうべし。念仏をつかまつりせうらわで、ただ異行ばかりをして極樂を欣いせうろう人は、極樂へも、え生まれせうらわぬ事にてせうろう由、善導和尚の仰せられてせうらえば、但念仏が決定、往生の業にてはせうろうなり。善導和尚は阿弥陀の化身にておわしましせうらえば、それこそは一定にてせうらえと申しせうろうにせうろう。また女犯とせうろうは不姪戒の事にこそせうろうなれ。また御君、達どもの勸当とせうろうは不瞋戒の事にこそせうろうなれ。されば持戒の行は仏の本願にあらぬ行なれば、堪えたらんに随いて持たせたまうべくせうろう。孝養の行も仏の本願にあらず、堪えんに随いて勤めさせおわしますべくせうろう。また銅の阿字の事も同じ事にせうろう。また錫杖の事も仏の本願にあらぬ勤にてせうろう。とてもかくてもせうらいなん。また迎接の曼陀羅は大切におわしましせうろう。それも次の事にせうろう。ただ念仏を三万もしくは五万もしくは六万、一心に申させ

おわしましそうらわんぞ決定けつじよう往生おうじようの行ぎようにてはそうろう。異善根いぜんこんは念仏ねんぶつの暇いとまあらばの事ことにそうろう。六万遍ろくまんべんをだに申もうさせたまわば、その外ほかには何事なにごとをかはせさせおはしますべき。まめやかに一心いつしんに三万五万念仏さんまんにごまんねんぶつを勤つとめさせたまわば、少少しょうしょう戒かい行ぎよう破やぶれさせおわしましそうろうとも、往生おうじようはそれにはよりそうろうまじき事ことにそうろう。

ただしこの中なかに孝養きようようの行ぎようは、仏ほとけの本願ほんがんの行ぎようにてはそうらわねども、八十九はちじゅうくにておわしましそうろうなり。あい構かまえて今年ことしなんなどをば待まちちまいらせさせおわしませかしと覚おぼえそうろう。あなかしこ、あなかしこ。

五月二日ごがつふつか

源空げんくう 御自筆ごじひつなり

ある時ときの御返事ごへんじ

およそこの条じようこそとかく申もうすに及びおよびそうらわらずめでたくそうらえ。往生おうじようをせさせたまいたらんには勝すぐれて覚おぼえそうろう。死期しご知りて往生おうじようする人ひとは入道にゅうどう殿どのに限かぎらず多くおほそうろう。かように耳目じもく驚おどろかす事ことは末代まつだいにはよもそうらわじ。昔むかしも道どう綽しゃく禪師ぜんじばかりこそおわしましそうらえ。かえすがえす申もうすばかりなくそうろう。ただし何事なにごとにつけても仏道ぶつどうには魔事まじと申もうす事ことの、ゆゆしき大事だいじにてそうろうなり。

よくよく御用心ごようじんそうろうすべきなり。かように不思議ふしぎを示すにつけても、便たよりを窺うかがう事もことそうらいぬべきなり。めでたくそうろうに随したがいていたわしく覚えさせたまいて、かように申しもうそうろうなり。よくよく御慎おんつしみそうらいて、仏ほとけにも祈いのり参まいらせさせたまうべくそうろう。いつか御上おんのぼりそうろうべき。かまえてかまえて上のぼらせおわしませかし。京きやうの人人ひとびと、大様おおようはみな信しんじて、念仏ねんぶつをもいまま少し勇すこみ合あいてそうろう。これにつけてもいよいよ進すすませたまうべくそうろう。悪あし様に思おぼしめ召めすべからずそうろう。なおなおめでたくそうろう。あなかしこ、あなかしこ。

四月三日しがつみっか 源空げんくう

くまがやにゆうちうどの
熊谷入道殿へ

道光の註
私わたくしにいわく、これは熊谷入道くまがやにゆうちうどう、念仏ねんぶつして様ようよう様の現瑞げんずいを感じたりけるを、上人しやうにんへ申しあげたりける時の御返事ごへんじなり。

おうじようじようど ようじん
往生浄土用心 第四

ひとつ、毎日御所作まいにちおんしよさ、六万遍ろくまんべんめでたくそうろう。疑うたがひの心こころだにもそうらわねば十念じゆん一念いっぺんも往生おうじようはしそくらえども、多く申しもうそうらえば上品じやうぼんに生まれむそうろう。釈しやくにも「上品じやうぼんの花台けだいに慈主じしゆを見みたてまつる。到いたる者は皆念仏みなねんぶつの多おほきに因よる」と

所作六万遍

そうらえば。

一つ、宿善によりて往生すべしと人の申しそうららん、僻事にてはそうらわす。かりそめのこの世の果報だにも前の世の罪功德によりて、善くも悪しくも生まるる事にてそうらえば、まして往生ほどの大事必ず宿善によるべしと聖教にもそうらうやらん。ただし念仏往生は宿善のなきにもよりそうらわぬやらん。父母を殺し、仏身より血を落やしたる程の罪人も、臨終に十念申して往生すと『観経』にも見えてそうらう。しかるに宿善厚き善人は教えそうらわねども悪に怖れ仏道に心進む事にてそうらえば、五逆などはいかにもいかにも造るまじき事にてそうらうなり。それに五逆の罪人、念仏十念にて往生を遂げそうらう時に、宿善のなきにもよりそうらうまじくそうらう。

されば『経』に「もし人多くの罪を造るとも、六字の名を聞くことを得ば、火車自然に去りて、華台すわなち来迎す」。「極重の悪人は他の方便なし、ただ仏を称念して極楽に生ずることを得」。「もし重業障ありて浄土に生ずる因なれども、弥陀の願力に乗ずれば必ず安楽国に生ず」。「この文の意、もし五逆を造れりとも弥陀の六字の名を聞かば、火の車自然に去りて、蓮台来たりて迎うべし。また極めて重き罪人の他の方便なからんも、弥陀を称えたてまつらば極楽に生ま

るべし。またもし重き障ありて浄土に生まるべき因なくとも、弥陀の願力に乗りなば安樂國に生まるべしとそうらえば、頼もしくそうろう。

また善導の釈には「曠劫よりこのかた六道に輪廻して出離の縁なからん常没の衆生を迎えんがために、阿弥陀仏は仏に成りたまえり」とそうろう。その常没の衆生と申しそうろうは、恒河の底に沈みたる生き物の身、大きに長くして、その河に憚りて、え動かず常に沈みたるに、悪世の凡夫をば譬えられてそうろう。また凡夫と申す二の文字をば狂酔のごとしと弘法大師釈したまえり。実にも凡夫の心は、物狂い酒に酔いたるがごとくして、善悪につけて思い定めたる事なし。一時に煩惱百度雜わりて善悪乱れ易ければ、いずれの行なりとも我が力にては行じ難し。しかるに生死を離れ仏道に入るには、菩提心を發し煩惱を尽くして、三祇百劫難行苦行してこそ仏には成るべきにてそうろうに、五濁の凡夫、我が力にては願行具わる事叶い難くて、六道四生に廻りそうろうなり。弥陀如来の事を悲しみ思ひて、法蔵菩薩と申しし古、我等が行じ難き僧祇の苦行を兆載永劫が間、功を積み徳を累ねて阿弥陀仏に成りたまえり。一仏に具えたまえる四智三身十力無畏等の一切の内証の功徳、相好光明說法利生等の外用の功徳、様様なるを、三字の名字の中に撰め入れて、この名号を十声一声までも称え

ん者を必ず迎えん、もし迎えずは我仏に成らじと誓いたまえるに、かの仏今現に世に在して仏に成りたまえり。名号を称えん衆生 往生疑うべからず、と善導も仰せられてさうろうなり。

この様を深く信じて念仏怠らず申して往生疑わぬ人を他力信じたるとは申し
 さうろうなり。世間の事にも他力はさうろうぞかし。足なえ腰いたる者の遠き道を歩まんと思わんに、叶わねば、船車に乗りて易く行く事これ我が力にあらず、乗物の力なれば他力なり。浅ましき悪世の凡夫の詔曲の心にて構え造りたる乗物にだにかかる他力あり。まして五劫の間思召し定めたる本願他力の船筏に乗りなば、生死の海を度らん事疑い思召すべからず。しかのみならず病を癒す草木、鉄を採る磁石、不思議の用力なり。また麝香は香ばしき用あり、犀の角は水を寄せぬ力あり。これみな心なき草木、誓を發さぬ獣なれどももとより不思議の用力はかくのみこそさうらえ。まして仏法不思議の用力ましまさざらんや。されば念仏は一声に八十億劫の罪を滅する用あり、弥陀は悪業深重の者を来迎したまう力ましますと思召し取りて、宿善のありなしも沙汰せず、罪の深き浅きも顧みず、ただ名号称うる者の往生するぞと信じ思召すべくさうろう。すべて破戒も持戒も貧窮も福人も上下の人を嫌わず、ただ我が名号をだに念ぜば、石

瓦かわらをへん変じて金こんとなさんがごとし。来迎らいじゆうせんと御約束おんやくそくせうろうなり。法照ほつしやう禪師ぜんじの『五会法事讚ごえほうじさん』にも、

「かの仏ほとけの因中いんちゆうに弘誓くわうぜいを立つ。名なを聞いて我われを念ねんせばすべて来迎らいじゆうせん。

貧窮びんぐうと富貴ふきとを簡えらはず、下智げちと高才こうさいとを簡えらはず、

多聞たもんと淨戒じようかいを持つとを簡えらはず、破戒はかいと罪根ざいこんの深ふかきを簡えらはず、

ただ心こころを廻えして多く念ねん仏ぶつせしむれば、能よく瓦礫がりがくをへん変じて金こんと成なさしむ」。

ただ御数珠おんずを繰くらせおわしまして御舌おんしたをだにも動はたらかさされずせうらわんは懈怠けだいに

てせうろうべし。ただし善導ぜんどうの三縁さんねんの中の親縁しんねんを釈しゃくしたまうに「衆生しゆじやう 仏ほとけを礼らいす

れば仏ほとけこれを見みたまう、衆生しゆじやう 仏ほとけを称とうれば、仏ほとけこれを聞ききたまう、衆生しゆじやう 仏ほとけを念ねん

ずれば仏ほとけも衆生しゆじやうを念ねんじたまう。かるが故ゆえに阿弥陀あみだ仏ぶつの三業さんごうと行者ぎやうじやの三業さんごうとかれ

これ一つひとになりて、仏ほとけも衆生しゆじやうのごとくなる故ゆえに親縁しんねんと名なづく」とせうろう

めれば、御手みてに数珠ずを持たせたまいてせうらわば仏ほとけこれを御覽ごらんせうろうべし。御

心こころに念ねん仏ぶつすぞかしと思おもひ召おほしめしせうらわば仏ほとけも衆生しゆじやうを念ねんじたまうべし。されば仏

に見みえまいらせ念ねんぜられまいらす御身おんみにてわたらせたまわんずるなり。さはそ

うらえども常つねに御舌おんしたの動はたらべきにてせうろうなり。三業さんごう相應さうじゆうのためにてせうろう

べし。三業さんごうとは身みと口くちと意こころとを申もうしせうろうなり。しかも仏ほとけの本願ほんがんの称しょう名みやうなる

が故に声を本体とは思召すべきにてそうろう。さて我が耳に聞こゆるほど申し
 そうろうは高声の念仏の中にてそうろうなり。高声は大仏を拜み、念ずるは仏の
 数へもなど申すげにそうろう。いずれも往生の業にてそうろうべくそうろう。

一つ、御無言めでたくそうろう。ただし無言ならで申す念仏は功徳少しと思
 召されんは悪しくそうろう。念仏をば金に譬えたる事にてそうろう。金は火に焼
 くにも色増さり、水に入るるにも損せずそうろう。かように念仏は妄念の起る時
 申しそうらえども穢れず、物を申し雑するにも紛れそうらわず。その由を御心
 得ながら御念仏の程は異事雑せずして、今少し念仏の数を副えんと思召さんは、
 さんでそうろう。もし思召し忘れて、ふと物など仰せそうらいて、あなあさ
 まし、今はこの念仏空しくなりぬと思召す御事はゆめゆめそうろうまじくそう
 ろう。いかようにて申しそうろうとも往生の業にてそうろうべくそうろう。

一つ、百万遍の事、仏の願にてはそうらわねども、『小阿弥陀経』に「もし
 は一日、もしは二日、乃至七日、念仏申す人極楽に生ずる」とは書かれてそうら
 えば、七日念仏申すべきにてそうろう。その七日のほどの数は百万遍に当りそ
 うろう由、人師釈してそうろう時に、百万遍は七日申すべきにてそうらえども、
 堪えそうらわざらん人は、八日九日などにも申されそうらえかし。さればとて

百 万遍申さざらん人の生まるまじきにてはそうらわす。一念十念にても生まれ
 そうろうなり。一念十念にても生まれそうろう程の念仏と思ひそうろう嬉
 しきに、百 万遍の功德を累ぬるにてそうろうなり。

一つ、七分全得の事、仰のままに申すげにそうろう。さてこそ逆修はする事
 にてそうらえ。さそうらえば後の世を訪いぬべき人そうらわん人もそれを憑まず
 して、我と励みて念仏申して急ぎ極楽へ参りて、五通三明を悟りて、六道四生の
 衆生を利益し、父母師長の生所を訪ねて心のままに迎え取らんと思ふべきにて
 そうろうなり。また当時日ごとの御念仏をも、かつかつ廻向しまいらせられそう
 ろうべし。なき人のために念仏を廻向しそうらえば、阿弥陀仏、光を放ちて地獄
 餓鬼畜生を照らしたまいそうらえば、この三悪道に沈みて苦を受くる者、その苦
 しみ休まりて命終りて後、解脱すべきにてそうろう。『大経』にいわく「もし三
 塗勤苦の処に在りて、この光明を見たてまつれば、皆休息を得てまた苦惱なし。
 寿終の後、皆解脱を蒙る」。

一つ、本願の疑わしき事もなし、極楽の欣わしからぬにてはなけれども、往
 生一定と思ひやられて、疾く参りたき心の、朝夕はしみじみとも覚えずと仰せ
 そうろう事、まことよからぬ御事にてそうろう。浄土の法門を聞けども聞か

ざるがごとくなるは、この度三悪道より出でて罪いまだ尽きざるものなり。また『経』にも説かれてそうろう。またこの世を厭う御心薄くわたらせたまうにてそうろう。その故は西国へ下らんとも思わぬ人に船を取らせてそうらわんに、船の水に浮かぶ事なしとは疑いそうらわねども、当時さして要るまじければ、いたく嬉しくもそうろうまじきぞかし。さて敵の城なんどに籠められてそうらわんがからくして逃げて罷りそうらわん道に、大きな河海なんどのそうらわいて渡るべき様もなからん折、親のもとより船を設けて迎へに給びたらんは、さしあたりていかばかりか嬉しくそうろうべき。これかように貪瞋煩惱の敵に縛られて三界の樊籠に籠められたる我らを弥陀悲母の御ころざし深くして、名号の利剣もちて生死の絆を截り、本願の要船を苦海の波に浮かべてかの岸に着けたまうべしと思ひそうらわん嬉しきは、歡喜の涙袂を絞り、渴仰の思胆に染むべきにてそうろう。せめては身の毛豎つ程に思ふべきにてそうろうを、のさに思召しそうらわんは本意なくそうらえども、それも理にてそうろう。罪造る事こそ教えそうらわねども、心にも染みて覚えそうらえ。その故は無始よりこのかた六趣に廻りし時も、貌は変れども心は変らずして、色色様に造り習いてそうらえ。ば今も初初しからず易くは造られそうらえ。念仏申して往生せばやと思ふ事はこ

の度初めて僅かに聞き得たる事にてそうらえば、きとは信ぜられそうらわぬなり。その上人の心は頓機漸機とて二品にそうろうなり。頓機は聞きて頓て悟る心にてそうろう。漸機は漸う悟る心にてそうろうなり。物語でなどをしそうろうに、足速き人は一時に参り着くところへ、足遅き者は日暮らしにも叶わぬようにはそうらえども、詣心だにもそうらえば終には遂げそうろうように、願う御心だにわたらせたまいそうらわば、年月を重ねても御信心も深くならせおわしますべきにてそうろう。

一つ、日ごろ念仏申せども臨終に善知識に遇わずは往生し難し、また病大事にて心乱れば往生し難しと申しそうろうらんは、さもいわれてそうらえども、善導の御心にては、極楽へ参らんとところざして多くも少くも念仏申さん人の命尽きん時は、阿弥陀仏聖衆とともに來たりて迎えたまうべしとそうらえば、日ごろだにも御念仏そうらわば、御臨終に善知識そうらわずとも仏は迎えさせたまうべきにてそうろう。また善知識の力にて往生すと申しそうろう事は『觀經』の下三品の事にてそうろう。下品下生の人なんどこそ日ごろ念仏も申しそうらわず往生の心もそうらわぬ逆罪の人の、臨終に初めて善知識に遇いて十念具足して往生するにてこそそうらえ。日ごろより他力の願力を憑み思惟の名号を称えて

極樂へ参らんとおもいそうらわん人は、善知識の力そうらわずとも仏は来迎したまうべきにてそうろう。

また軽き病をせんと祈りそうらわん事も心賢くはそうらえども、病もせで死にそうろう人もうるわしく終る時には、断末摩の苦しみとて、八万の塵勞門より無量の病、身を責めそうろう事、百千の矛劍にて身を切り裂くがごとし。されば眼なきがごとくして見んと思ふものをも見ず、舌の根竦みていわんと思ふ事もいわれずそうろうなり。これは人間の八苦のうち死苦にてそうらえば、本願信じて往生願いそうらわん行者もこの苦は逃れずして悶絶しそうろうとも、息の絶えん時は阿弥陀仏の力にて正念になりて往生をしそうろうべし。臨終は髮筋切るがほどの事にてそうらえば、よそにて凡夫定め難くそうろう。ただ仏と行者との心にて知るべくそうろうなり。その上、三種の愛心起りそうらいぬれば、魔縁便を得て正念を失いそうろうなり。この愛心をば善知識の力ばかりにては除き難くそうろう。阿弥陀仏の御力にて除かせたまいそうろうべくそうろう。諸邪業繫無能礙者、頼もしく思召すべくそうろう。

また後世者と覚しき人の申すげにそうろうは、まず正念に住して念仏申さん時に仏来迎したまうべしと申すげにそうらえども、『小阿弥陀經』には「諸の

聖衆とともに現にその前に在す。この人終る時心顛倒せず、すなわち阿弥陀仏

の極楽国土に往生することを得」とそうらえば、人の命終らんとする時、阿弥

陀仏聖衆とともに目の前に来たりたまいたらんをまず見まいらせて後に、心は

顛倒せずして極楽に生まるべしとこそ心得てそうらえ。されば軽き病をせばや、

善知識に遇わばやと祈させたまわん暇にて、いま一遍も病なき時念仏を申して、

臨終には阿弥陀仏の来迎に預かりて三種の愛を除き正念になされまいらせて、

極楽に生まれんと思召すべくそうらう。さればとて徒にそうらいぬべからん善

知識にも向かわで終らんと思召すべきにてはそうらわず。先徳たちの教にも、

臨終の時に阿弥陀仏を西の壁に安置しまいらせて、病者その前に西向きに伏し

て、善知識に念仏を勧められよとこそそうらえ。それこそあらまほしき事にてそ

うらえ。ただし人の死の縁は予ねて思うにも叶いそうらわず。にわか大路、徑

にて終る事もそうらう。また大小便痢のところにて死ぬる人もそうらう。前業

逃れ難くて、太刀小刀にて命を失い、火に焼け水に溺れて命を滅ぼす類多くそ

うらえば、さようにて死にそうらうとも、日ごろの念仏申して極楽へ参る心だに

もそうらう人ならば、息の絶えん時に、阿弥陀、観音、勢至来たり迎えたまうべ

しと信じ思召すべきにてそうらうなり。『往生要集』にも「時処諸縁を論せず、

臨終に往生を求め願うに、その便宜を得たること念仏にはしかず」とそうらえば頼もしくそうろう。

この由を読み申させたまうべくそうろう。八つの事記して参らせそうろう。これは後に御尋ねそうらいし御返事にてそうろう。

一つ、所作多く宛てがいて少かんよりは少く申さん、一念も生まるなれば、と仰せのそうろう事、まことにさもそうらいぬべし。ただし『礼讃』の中には「十声一声まで定んで往生を得」乃至一念も疑心あることなかれ」と釈せられてそうらえども『疏』の文には「念念に捨てざる、これを正定の業と名づく」とそうらえば、十声一声に生まると信じて念念に廢るる事なく称うべきにてそうろう。また「弥陀名号相続して念ず」とも釈せられてそうろう。されば相い続いで念ずべきにてそうろう。一食の間に三度ばかり思い出でんはよき相続にてそうろう。常にだに思召し出でさせたまいそうらわば、十万六万申させたまいそうらわずとも、相続にてそうらいぬべけれども、人の心は當時見る事聞く事に移るものにてそうらえば、何となく御まぎれの中には思召し出でん事、難くそうらいぬべくそうろう。御所作多く宛てて常に数珠を持たせたまいそうらわば、思召し出でそうらいぬと覚えそうろう。たとい事の障ありて少かせおわしましてそ

うろうとも、あさましや、少きつる事よと思召しそうらわば、御心に係けられ
 そうらわんずるぞかし。とてもかくても御廃れそうらわずは相續にてそうろうべ
 し。また少けてそうらわん御所作を次の日申し入れられそうらわん事、さもそ
 らいなん。それも明日申し入れそうらわんずればとて御油断そうらわんは悪しく
 そうろう。せめての事にてこそそうらえ、御心得あるべくそうろう。

魚鳥に七箇日の忌のそうろうなる事さもやそうろうらん。え見及ばずそうろう。
 地体は生きとし生ける物は過去の父母にてそうろうなれば喰うべき事にてはそ
 らわす。また臨終には酒、魚、鳥、葱、韭、蒜などは忌まれたる事にてそうら
 えば、病など限りになりては喰うべきものにてはそうらわねども、当ときと死
 ぬばかりはそうらわぬ病の、月日つもり、苦痛も忍び難くそうらわんには聴され
 そうらいなんと覚えそうろう。御身穩しくて、念仏申さんと思召して、御療治
 そうろうべし。命惜しむは往生の障にてそうろう。病ばかりをば療治は許され
 そうろうなんと覚えそうろう。

二つの事の御尋ね、記して参らせそうろう。よくよく読み申させたまうべく
 そうろう。

愚見の及ぶところ集編かくのごとし。しかるに世の中に黒谷の御作という文多し。いわゆる『決定往生行相抄』『本願相應抄』『安心起行作業抄』『九条の北の政所へ進する御返事』かの御返事に二通あり。これはこの文どもは余の和語の書に文章も似ず、義勢も違えり。大きに疑いある上に、古き人偽書と申し伝えたり。しかればこれを入れず。また『廿二問答』とて廿六七張の文あり。また『臨終行儀』とて五六張の文あり、真偽知り難し。いささかおぼつかなきによりてこれを除けり。また『念仏得失義』という文あり、上人の御作といえり。しかれどもこれは正しくあらぬ人の作れる文なり。この外にまことしからぬ文、二三本あり。なかなかいうに足らぬものどもなり。およそ二十余年の間、遍く花夷を尋ね、詳しく真偽を明らかにしてこれを取捨すといえども、謬る事多からん。後賢必ず正すべし。また落つるところの真書あらば、この拾遺に続くべし。ころぎすところは衆生をして浄土の正路に趣かしめんがためなり。あなかしこ、あなかしこ。

望西楼沙門了慧謹疏

語灯録瑞夢事

瑞夢

嵯峨に貴女おわしき。後世を願う御心深くして、往生院の善導堂に御參籠ありて往生を祈り申されけるに、御夢に善導和尚一卷の巻物を持ちて「これはことばの灯火といふなり。これを見て念仏申さば決定往生すべし」とて授けさせたまえば、よに嬉しく覺えて受け取らせたまえば夢覺めぬ。有り難く思召して、かかる文やあると諸方を御尋ねあるにすべてなし。さては妄想にてやありつらんとて、重ねて御參籠ありて祈請申されける時、一尊院往生院兼參する本心房という僧、善導堂へ参りたりけるに、この事を御尋ねありければ、本心房申していわく「ことばの灯火と申す文は語灯録の事にてぞせうららん。法然上人の御書を集めたる文にてせうらう」とて貸し参らせたりければ、慶びてこれを御覽するに、往生疑なく覺えさせたまひければ、やがて写さんと思召し立ちける夜の御夢に、束帯なる上臈の二人両方に立たせたまひたりけるを「いづくより入らせたまひてせうらうぞ」と申されければ「我はこのことばの灯火の守護のために北野平野の辺より参りてせうらうなり」と仰せられけるに、また側に貴げなる僧の「その上臈は北野天神平野大明神にておわしますなり、一切衆生の

信を増さんずる聖教なる間、三十神の番番に回りに守護せさせたまうぞ」と仰せらるると思ひて打ち驚かせたまひぬ。ことに貴く思召してこれを写して常に見参らすれば「往生の事は今は手に取りたる様に覚えさうろうぞ」と、正しく御物語りそうらいきと本心房伝え申しき。さてそれより一心に御念仏ありて、
 正和元年（壬午）八月に三日先立ちて、時日を知らしめして「我はこの月の四日の卯の時に往生すべし」と仰せられけるが、日も時も違わず八月四日卯の初めに高声念仏百三十遍称えて、御声とともに御息止まらせたまいき。御歳廿九と承りき。詳しくは『語録験記』のごとし。
 善導の御授、神明の御守護、かたがた頼もしく覚えて憚りながらこれを記すところなり。およそこの録を見て安心を取りて往生を遂げたる人多し。詳しく記すに及ばず。

元亨元年辛酉の年、偏に上人の恩徳を報じたてまつらんがため、また諸の衆生を往生の正路に趣かしめんがためにこの和語の印板を開く。

一向専修沙門南無阿弥陀仏円智謹疏

沙門了恵、感歎に堪えず、随喜のあまり、七十九歳の老眼を拭いて和語七卷

の印本を書く。

元亨元年辛酉七月八日終謹疏

法橋幸巖卷頭